

「ミヒンタレー」は、紀元前247年にインドのアショカ王の王子マヒンダ師によって、初めて仏教が伝えられたスリランカの地名である。

その経緯を、タランガッレ・ソーマシリ師が教え下さったところに依れば、マヒンダ師の説教を聴いて、アヌラーダブラの当時の王が仏教に帰依された。7日間で8500人が仏教徒となり、その後、スリランカ全域に仏教が広まった。王は感謝の気持ちとしてマヒンダ師に68の仏教石窟と僧院を贈った。伝説によれば、山の神・デーヴァは、仏教流布のためにインドより訪れたマヒンダ師と王を会わせる為、鹿に身を変えて現われた。王は、この鹿を追いまヒンダの許に導かれたと云う。以来、ミヒンタレーは、仏教の重要な都となった。タイトルの「シャンティ」とは、国際梵字仏協会・窪田成円会長作詞の文言から抜粋させていただいた。「平和よ成就あれ」という意味である。

仏教揺籃のミヒンタレー

スリランカの文化三角地帯¹⁾は、著名な仏教遺跡が目白押しである。然し、ミヒンタレーはスリランカ仏教のスタート地点であるという点で他の仏教遺跡と異なる。前述の、山の神・デーヴァが鹿に身を変えて現れたという物語は周知されているが、6月の満月の頃になると仏教伝来の「ボソン祭」が行われる。国内外から何千人もの仏教徒が集って、ミヒンタレーの山を目指し、頂上にある岩山に登って満月を拝む。頂上まで、4つの地区に分かれており、総数1840段の階段の両側に遺跡が並んでいる。スリ



マハー・サーヤ大塔

ランカの気候は、高温多湿の熱帯であるから、1月といえども熱い。駐車場から杖を持って、私たちは階段を上り始めた。

カンタカ・チェーティヤ寺院が右側に見えた。12mの高さの仏塔があり、紀元前1世紀頃に建てられたと聞く。柱や石の彫刻に眼を奪われた。ガードストーンに動物を彫り込んだ装飾があった。象、馬、ライオン、牛の四動物は人生を語るといわれ、象＝誕生、馬＝老、ライオン＝病、牛＝死、輪廻（転生）を意味するそうだ。そろそろ私も牛に近づいていると苦笑する。歩きすぎたためか足痛が始まり、友人も疲れてきたと云う。木陰に座って、同行の、ソーマシリ師の話を伺った。「この上に行くと、アムバスターレー大塔が在り、マヒンダ師と王が出合った所なんだ」そうだ。大塔には、マヒンダ師の遺骨があると云われる。マハー・サーヤ大塔は丘の頂上に在る。ミヒンタレー最大の仏塔で釈迦の髪が祀られている。このような話の中で私が関心を抱いたのは、「ヴェダハーレ」と呼ばれる古代の病院跡やハーブ風呂である。当地の遺跡の食堂跡には米やカレーを入れたらしい巨大な石の箱がある。当時の食事はハーブのスープもあったと思われる。僧院には2000人の僧侶が生活し、200人以上の世俗の民が雇わ



カンタカ・チェーティヤ寺院





アムバスタレー大塔

れていたとミヒンタレーの博物館の碑文にも記されていた。医師・教師・調理師への報酬額や経費の明細書などが整理されて各年度末に収支を提出するように義務づけられていた・・・。

想像するに、世間一般の生活の規範がこの地で出来上っていたことになる。つまり、ミヒンタレーの仏教は人々の生活に深く関わり、習慣や禁制などを創り出してきた。スリランカ人の穏やかな生き方も、人間はどうあるべきかの問いかけも、このミヒンタレーから始まったと云うべきである。

ミヒンタレー国際梵字仏文化センター

「梵語梵字を通して仏教文化研修や国際交流親善をされておられる方がいらっしゃる。スリランカに訪れたら、是非、窪田成円(国際梵字仏協会長/梵字講師)さんの寺に行ってみなさい」と勧めて下さったのは、日本スリランカ協会・高崎邦雄事務局長であった。

梵語とは、古代インドで使われたサンスクリット語を云い、これを記す文字が梵字である。更に、多くの人々に親しみをもたれるよう創意工夫されたのが、梵字一文字が神仏を表わすという成円師継承の三井喬円流梵字仏である。梵字は発祥地のインドや中国でほとんど^{すた}廃れてしまい、日本の一部の人によって継がれてきている状況だと聞いている。この梵字を通して世界平和と人類の安寧を願い、国内外で広く活動を展開されている方が窪田成円師とのことである。

2013年1月12日、キャンディーロードに面した、国際梵字仏文化センターに立ち寄った。日本風山門をくぐると、左手に梵字を納仏した仏舍利塔があり、

右手に菩提樹が茂っていた。「梵字仏喬円記念館」が正面に存在感を誇り、何処を見廻しても整然として、清潔感があった。日本の庭園も造られている。日本留学の体験があり窪田成円師の門下生であるサンガ・ラタナ・マハテー口師が、この梵字スリランカ文化財団代表として勤めておられる。ニコンボに在る寺院住職と幼稚園経営者としてご多忙を極める方で、生憎私たちが訪れた日は留守であった。記念館の土地は時の政府から提供を受け、2002年、日本の有志による基金を元に建立されたそうだ。

窪田成円師は、私と同世代であり戦争体験者である。近年ではスリランカの内戦を観、アフガニスタンのバーミヤンの仏跡破壊や世界を震撼とさせる争いごとを観て来られた。成円師は常に、世界恒久平和を梵字仏に込めることを考えられ、国際梵字仏文化センターの建立に挑まれたのであろう。アショカ王もマヒンダ師も21世紀の仏教伝道者として窪田成円師の功績を認めておられるかもである。

甲斐市国際梵字センター

竜王駅(中央線甲府駅の隣)から歩いてもさほどではない所に窪田成円師宅が在る。梵字の館は、その屋敷の中に設けられている。由緒あるお家柄で300年も続いてきた。台風が通り過ぎたあとの2014年9月9日、立派な門構えの国際梵字センターを訪れた。

梵字石碑展示庭園や梵字マンダラ作品が所狭しと並べられてあった。窪田師からさまざまな苦労話やマスコミで紹介されたことを伺ったり、活動取材され放映されたビデオなどを拝見した。梵字啓蒙活動に日々、明け暮れておられるとのことであった。誰もが、安隠で仏様と向かい合える場として竜王新町の甲斐市梵字センターの館を皆様に勧めたい。

(写真はグーグル・パノラミオから転載)

■注

文化三角地帯(Cultural triangle):スリランカのほぼ中央に位置する古代遺跡が集中するエリアのことである。アヌラダプラ、ポロンナルワ、キャンディの3都市を結ぶ三角形の中に、シーギリヤ、黄金寺院のあるダンブッラ、ミヒンタレー、ナーランダなど、スリランカで重要な遺跡が多く含まれている。
(ウィキペディア)